

YNAC 通信

2017.08.01 No.34



還暦を迎えて

松本 毅

7月4日の誕生日で60歳、還暦を迎えた。また3月には初孫も生まれた。体力的には衰えを感じつつも、気力は充分だと思っていたが、さすがに還暦・初孫となると衰えというよりは世代交代の時期なのではまいかと思う。

屋久島に移り住んで30年、丁度人生の半分をここで暮らしてきたことになる。そして24年前YNAC設立の前後には、分野は違っても、多くの先輩方にたくさんのことを教えられ、その背中を追いつながらここまでやって来ることができた。

「国立環境研究所」の佐竹研一さんは、まさにYNACの根幹を築いてくださった方といえる。酸性雨の研究をされていたのだが、毎年様々な分野の研究者をつれて、屋久島を訪れて下さった。そして素人の我々も一緒にフィールドを歩き、毎晩尽きることのないディスカッションにも加えていただいた。屋久島の自然のあらゆるものに飽くなき探求心を持ち、深い考察と無限のロマンを語る佐竹さんとの時間は、今もYNACの中に生き続けている。

今では世界的なサンゴ研究者である野島哲先生には、「自然に関わること」イコール「自然保護」に走りがちだった私に、冷静にモニタリングしながら考察することの大切さを教えていただ

いた。サンゴのことを淡々と語る野島先生の言葉には生物や生態系といったものに対する根本的かつ包括的な視線があり、海をフィールドとする私の視野を大きく広げてくださった。

屋久島の季刊誌「生命の島」の編集長日吉眞夫さんには、屋久島移住のきっかけを与えていただき、その上おりにふれて屋久島の文化や生活について多くのことを教えていただいた。また「生命の島」に私の海中写真やエッセイを連載させていただいたことは、私が屋久島の海を観察し思いを巡らせ、深く考察する機会を与えていただいたと感謝している。私が今こうやって屋久島の自然や海に関わりながら生活できているのは日吉さんの様々なアドバイスのお陰である。

今から30年前、エコツアーガイドという道の先には背中を見せてくれる先輩はいなかった。その分自分達で議論をし、試行錯誤をしながら歩み続けてきた。しかし最近エコツアーガイドの養成講座の講師を依頼されることが増えた。思えば遠くへ来たものだ(?) 還暦を迎えて後ろを振り向いたら、後ろにはたくさんの若い人たちがいた。しかしその場で語ることは、いわゆる成功体験ではない。自分が好奇心を持って学ぶことの喜びと、何かを創造していく時に目の前に現れた大小の問題を解決するために、志を同じくする人たちと議論をしながら進むことの大切さだ。

私の人生を変え、YNACの基礎をつくって下さった諸先輩方に感謝しながら、私もまっすぐに恥ずかしくない背中を持つ老人になりたい。



コケの美しい森、屋久杉の巨木の森、小さな島なのにそびえ立つ山々、大迫力で美しい沢、ウミガメが泳ぐ海、、、

屋久島の自然の素晴らしさは、屋久島を訪れたことがある方なら、きっと体感されたのではないだろうか。また、未だ訪れてはいないけど、どこかしらで見聞きしている方も多いと思う。

たいていの場合、日中の屋久島の自然を思い出すだろうが、実は夜も面白いのだ！

どの時期に来ても出会える、素晴らしい星空！

自然豊かな場所なので、星空がきれいなことは想像しやすい。

しかし、それをはるかに超えるのではないだろうか。星の数が多すぎて、星座を見つけにくい。一体どの星を結んで良いのやら。天の川も、ミルキーウェイと呼ぶのが自ずと理解できるほど白っぽく、まるで雲のように見える。

星空は島内のどこでも見られるが、やはり街灯の多い市街地では、見え方が白んで薄くなってしまふ。

通りからちょっと外れて、暗闇に入ってみよう。

里からすぐ後ろにそびえる前岳の山並みと、その上にちりばめられた満天の星空。

写真が趣味の方はぜひ、とびきりの1枚を納めていただきたい。カメラで撮影することで、目には見えていない小さな星の輝きをも写すことができる。

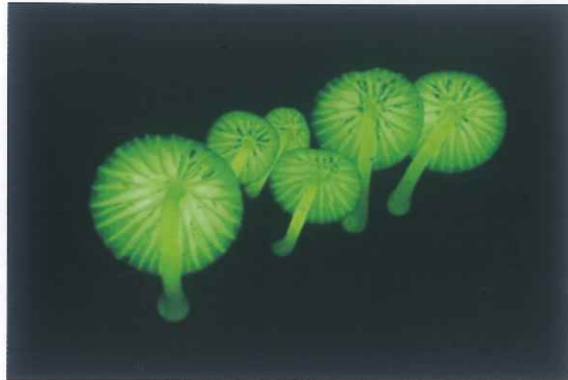
一方、写真が趣味ではない方も、自分の目で見て、吸い込まれるような星空を、心に刻んでいただきたい。晴れた夜はぜひ、空を見よう。

梅雨時の期間限定！光るキノコ

過ごしやすい初夏が過ぎ、梅雨に入る5月末から6

月末。大雨が止んだ、湿度と温度がやや高め、光るキノコが見られる。と言っても、ぱっと森に行くと、ピカッと光っているのが見られるわけではない。

暗闇に目を慣らさなければいけない。街灯の明りや月明りもない真っ暗な森。しかも、若い森ではなく、照葉樹の大きな古い木があるような森で、カッと目を見開いて待っていると、そのうち、ぼやーっと何かが光っているのが見えてくる。近付いてみると、その光がキノコが発しているものとわかる。



シイノトモシビタケ。スタジイの朽ち木に生えているのを撮影。

どうして光る必要があるのか。

一説には、光ることにより、暗闇で自分の存在をアリなど小さな虫にアピールし、えさとして運んでもらい、胞子を運んでもらっているのだそうだ。

暗闇で運んでもらう、、、なんだか闇の取引をしているようだ。

光るキノコを見る目が身についたら、光っているのが、実はキノコだけではないことに気付く。

なんと、落ち葉も光を放っているのだ！落ち葉や木を分解している菌類に、発光する特徴があるものもあるのだろうか。月明りに照らされているように白く、淡く、光を放っている落ち葉。気付いたときは、感動するだろう。

初夏の夜に舞うホタルの光

光るキノコが見られるのと同じ時期、ホタルも幻想的な光を発しながら暗闇を舞う。

川沿いを歩いていると、ホタルが舞うのに出会えるかもしれない。

島内でよく見られる場所として、宮之浦にある屋久島総合自然公園。公園内に川の流れが作られており、そこにはたくさんのホタルが光を放って舞っている。

また、麦生には「桜とホタルの里公園」があり、そちらでもホタルが見られる。



宮之浦「屋久島贈号自然公園」にて

メスへの求愛の光だが、昆虫と人との垣根を超えて、魅せられてしまう幻想的な光だ。

夏場だけ、しかも、新月・満月の夜！ベンケイガニの放卵

屋久島といえば、ウミガメの上陸頭数日本一で、その産卵が見られることで有名。しかし、感動的な産卵はウミガメだけではない。

この夏、私が感動したのがベンケイガニの産卵だ。春先から河口付近に、赤いカニが沢山、ワラワラと現れるようになる。



ベンケイガニだ。汽水域の川沿いから森にかけての範囲で生活している、鮮やかな朱色の体長5cmほどのカニだ。熟れて落ちた果実や、ミミズの死体に群がっていたりする。

このカニたちが卵を産む、いわゆる放卵が、夏場の満月、そして、新月の夜に見られるのだ。

満潮の時間に合わせて海に降りて行き、水辺に浸かって、体を震わせて卵を水中に放つ。

満月と新月の夜の満潮という限られた時間に見られる一大イベント。

満潮の時間に合わせて降りてくるカニたち。

自分は、それよりも先に水際に降りて待機。

カニの放卵は、日没後のほんの10分程度だという。



沢山の卵をおなかに抱えた母ガニ。水辺に降りていく様子。

日が沈み、カニの姿も見失ってしまうくらいの暗さになった頃、水際に歩いて浸かるカニがやっと出て来る。体がバネになったかのように、縦に震わせて、卵を水中に放つ。

1~2秒震わせると、パッと水から上がり、離れて行く。水中に放たれる卵は数千個。明かりに照らされて白く映る無数の卵は、まるで水中に舞う雪のようだ。

しかしそこには、エビやハゼなどの小魚が待ち構えている。沢山放卵しても、ほとんどがそれらの餌食になってしまう。

難を逃れて残った卵がかえると、ゾエア幼生のプランクトン生活が始まる。その後脱皮を繰り返し、メガロパ幼生を経て、カニの形になるのだという。

今、まさに放卵したカニは、厳しい生き物界を生き抜いてきた強者で、そしてまた、次の世代へ命を繋いでいるのだ。頭が下がる思いだ。



体を震わせるため、水面に波紋が広がる。

屋久島の夜を楽しむために野外に行く場合は、虫対策、寒さ対策を忘れずに。また、藪などに入るとマムシなどいることもあるので、危険な場所には入らないようにしていただきたい。

さて、屋久島の夜を楽しむ最後は、美味しい焼酎でダイヤモンド。ダイヤモンドとは、鹿児島弁で晩酌のこと。屋久島の水は、口当たり柔らかな超軟水。その水で作られる焼酎は美味しい！

ほろ酔い気分、屋久島の旅を振り返りながら、また次の楽しみを見つけるのも良いのでは♪

如竹散人乱拍子（じょちくさんじんみだれびょうし）

松本 淳子

かれこれ15年位前から「泊如竹（とまりじょちく）」にとられていた。いつも頭の片隅には如竹さんがいて...ただいだけで何を語るでもなく、何も見せてもくれないのだけれど「如竹さんの芝居が書きたい」と思い続けてきた。誰に頼まれたわけでもなく、上演する劇団を持っているわけでもなく...ただただそう思いながら資料を探しては読んで、どんどん興味が広がって、やがて收拾がつかなくなって、苦しくなって、やめたい、ここで投げ出しても誰にも責められはしないのだから...という葛藤をずっと繰り返してきた。勝手に自分が自分にかけて呪い(?).....そうできっと。

屋久島が世界自然遺産に登録された理由のひとつが「固有種であるヤクスギの自生林がある」ということである。そしてヤクスギは広く知られるところとなり、「屋久杉自然館」ではヤクスギについての展示が常設され、その中に泊如竹の名前も見られる。「貧しい島民の生活を助けるためにヤクスギを伐って年貢として納めることを奨励した」と。それも一七日（ひとなぬか）山に籠り山の神の許しを得たのだという。出身地の安房では、今でも「如竹先生」と呼ばれ、川沿いの廟では毎年5月25日の命日に「如竹踊り」が奉納されている。

泊市兵衛（後の如竹）は1570年（元龜元年）屋久島安房の船大工（舵工）の家に生まれ6歳の時に村の法華宗本佛寺に小僧として入寺し法号日章となった。屋久島の寺が律宗から法華宗にかわったのは、1488年法華僧日増（にちぞう）が靈験をもって山の鳴動をおさめたことが機縁だった。日章はそ

の後18歳で勉学のため上洛し「京都本能寺」の学林「尼崎本興寺」に入った。当時の畿内は、日蓮を宗祖とする法華経信仰が盛んで「法華の巷（ちまた）または題目の巷」と言われていた。そもそも15世紀、応仁の乱で戦場になった京都の町の復興に、かたい結束と自治の精神を持って尽力したのが、商工業者を始めとした町衆であり、そのほとんどが法華宗門徒だった。

「法華経」はどの仏教宗派においても重用されている経であり、前より屋久島で信仰されていたという「律宗」においてもまた然りである。ただ日蓮は「南無妙法蓮華経」と題目を唱えることで救われると教えた。「南無阿弥陀仏」の一向宗と同様に仏教が民衆の中に浸透していく大きなムーブメントだった。誰もが「救済と幸福」を受け取る資格が保証され、寺は地域コミュニティの中心となっていく。

日章（後の如竹）が上洛したのは、織田信長が最期を遂げたといわれる『本能寺の変』のわずか5年後のことだった。信長がなぜその時本能寺にいたのかということについては、種子島出身の僧日蓮（にちけい）を通じての鉄砲と火薬の調達が関係していたと言われている。当時の本能寺貫主は14代日衍（にちえん）であったが、日蓮はあたかも責任をとるがごとく本能寺再建に力を尽くし、その働きが評価されて本能寺と本興寺の15代貫主に出世する。一方上洛後日蓮を助けて働いた日章は、論語にいう40歳にして惑わずの筈が、40歳前に寺を出て薩摩の南浦文之（なんぼぶんし）臨済宗僧の元で儒学・朱子学（王の法）を学ぶことになる。当時仏教僧にとって儒学は教養のひとつでしかなく、儒学者はことごとく仏教を批判していたが、日章は僧形のまま儒者としての名『如竹』を名乗る。そして散人とは官職につかないという

意味や閑人の意を込めて本人が記す署名だ。

やがて100年以上続いた戦乱の世が落ち着き1593年（文禄4年）の太閤検地で屋久島の石高は3,630石であると評価された。7割年貢とするとおよそ1,000人の口を養うことができる土地であるということだ。それを木材・海産物・山役・浦役で年貢として納めることになる。

そしてその検地と同時に島津によって屋久島の木材統制を強化する「屋久島置目（掟）」が定められた。これは公儀（＝中央政権）はもちろん島津氏が材木を必要とするときは、必要なだけ材木を差し出すこと、逆に他国へ材木を出すことや他国から材木を買いに来る船を入れることを禁じたものだ。つまりこれまでの様に島民が勝手に木を伐り売ってはいけないという法による領民支配だ。屋久島に住む人々が人別帳を作られきっちり年貢を徴収される「百姓」になったと同時に木材を勝手に換金できない「貧しい島民」が出現した。

おそらく若い頃の日章も読んだであろう日蓮の著書に『立正安国論』がある。そこで日蓮は王法と仏法の合致をしきりに説いている。ここで言う王法とは、天皇を中心にした為政者による国の守り方であり、仏法は仏教者による国の守り方である。

仏法と王法を学んだ如竹は、戦乱の世が終わり、人々が村に帰され、年貢を払う、つまり社会の仕組みが整備される時代において「年貢として屋久杉の平木を出す」ことについて「島津に進言した」と言われている。「国民（くにたみ）として統合されていく道を積極的に推し進めることで貧しい島民が助かった。」めでたしめでたし、という歴史解釈がわたしにはどうも今ひとつわからなかったし、このわからないという

ことが原動力になって戯曲を書き進めてきた。

如竹さんは僧として本寺で出世もせず、屋久島本佛寺に戻るでもなく、教線拡大の布教に歩くでもなく、かといって還俗（僧でなくなる）するでもなく、徳川幕府が武士の教育として取り入れようとした儒学思想の波に乗ることもせず、しかし求められたら藤堂高虎や島津光久にも四書五経の講義をした。また南浦文之から学んだ朱子学のテキストを自費出版し、それを元に講義を張りもした。琉球に渡り尚豊王に「日本語読みの朱子学」の講義をしたのが63歳になってからで、明の冊封使が来る前の年のことだった。そして（おそらく）屋久島以上にのんびりした気質を持つ琉球の人々を見て安房の人達に手紙を出す。その内容が昼間から酒を飲むな、朝は早起きをして働け.....云々。そして最後に自分が村を守るから安房川のほとりに墓を作るよう言い残した。如竹さんは東の海からやってくる何から村を守ろうとしたのか、これが今回の戯曲のキモです。

つきましては今年の冬「屋久島学ソサエティ」で芝居「如竹散人乱拍子」を上演します。協力して下さる方、スタッフ、出演者の募集もこれからです。





トウモロコシ畑を抜けると、ボールパークではなく、バビルサの棲む無名の熱帯雨林が広がっていた。

インドネシア語で、「バビ」とは豚を「ルサ」とは鹿を指す。形容詞が後に来るようなので、意味としては鹿のような豚ということになる。つまりは足が長いということで鹿のような足を持つ豚ということからきているそうだが、驚くべきは、雄の上あごの牙が鼻の上の皮膚を突き破って長く伸び、頭に向かって湾曲していることである。この信じがたい奇妙な動物を見ることができるといことで、2017年6月、インドネシア・スラウェシ島に渡った。

スラウェシ島とは

スラウェシ島は、マカッサル海峡を挟んでボルネオ島の東に位置し、ダーウィンとともにマレー諸島で進化論を発見したA. R. ウォレスをおおいに悩ませた島として知られる。アジアの動物であるサルやシカとともにオーストラリアの有袋類・クスクスが棲む不思議な島だからだ。今ではアジア側の地塊にゴンドワナ大陸のかけらが衝突して出来たということで、このような不思議な動物相が説明されているが、19世紀のウォレスには、大陸の移動など想像すらできなかったであろう。

今回の舞台は、スラウェシ島北部のゴロンタロ州。イスラム教徒が大部分を占め、インドネシアの中でもお隣のマナドと並び最も治安の良い地域だそう。このうちバビルサを見ることができるのは、ナントウの森。国の自然保護区に指定されている。昨年10月に旅行者に解放されたばかりで、まだほとんど知られていない無垢な森で、6月の旅行者はお前一人だけだと言われた。ナントウの森までは州都ゴロンタロシティから西へ直線距離でおよそ90km。陸路を車で向かうのだが、途中バイクに乗り換えなければならないなどなかなか手ごわい。

州都周辺は低地で広大な水田地帯が広がっている。日本人に馴染みの深い水田景観は、親近感を持たせてくれる。とにかく人や

車が多く、活気に溢れ、限界集落の続く日本の農村地帯とは大違いだ。狭い対向2車線の道路に、車やベントロ、バイクが入り乱れているため、渋滞しがちなのだが、プヒプヒ言わせながら、対向車をものともせず追い越していくスラウェシ3車線道路で、それなりに車は流れていく。さすがにあまりに強引な追越しをすると対向車から「バビ！」と罵声を浴びせられたりする。イスラム世界では最大の侮辱言葉のようだ。

1 時間ほど走り郊外の丘陵地帯に差し掛かると今度はトウモロコシ畑が広がってくる。ゴロンタロでは重要な農産物で、韓国あたりへ輸出されているという。広大な農地に米もとうもろこしも年に3回採れるというから食うには困らないであろう。ゴロンタロのお米はタイ米などとは比べ物にならないくらいおいしかったが、これも年中新米を食べているからとのことで、羨ましい限りである。

2 時間も走り 3/4 ほど来たところで、主要道はずれとんでもないオフロードとなってくる。巨大なでこぼこ道を車の腹をこすらないように、超低速で進む。1時間ほど走ったところで、ついにバイクに乗り換える。バイクの後ろに跨り、モトクロスコースのようなぬかるみの道を進む。途中路肩がなくなっていたり、橋の敷き板がぼろぼろ、スカスカになっていたり、もはや道路とは呼べないようなところを走り、バイクに乗り換えたのが納得できた。ここから先は車さえ来ない未開の地だと思われた。バイクで走ること約1時間、ゴロンタロシティを出発して、およそ4時間半でナントウの森入口の村サリタロに到着した。

サリタロ村のホームステイ

サリタロの村にはいわゆる宿泊施設がなく、商店の住宅にホー



ムステイさせていただく。電気は来ているが、突然停電したりするため、自家発電機も用意されている。とりあえずバッテリーの充電は可能。3部屋にダブルベッドが置かれ、2人ずつ計6名まで宿泊可能とのこと。当然エアコンはないので吊られた蚊帳の中で寝る。このあたりは基本的に井戸水で、電気でポンプアップされると水道のように使うことができるが、なぜかこまめにスイッチを切る必要がある。シャワーはないが、桶にためた水で行水することが出来、それなりに快適だった。

今回はちょうどアマダンの月にあたり、かなりやっかいであった。日中は断食のため食事を摂ることができないため、皆、朝3時から朝食をとる。そこから大音響でテレビを見るので、うるさくてたまらない。また夜は6時を過ぎると食事ができるのだが、この時期だけやたらと爆竹を鳴らす習慣があり、これにも驚かされる。しかしそんなことよりも、朝食、昼食を全て一人で食べなければいけないのが、何より困った。親切にいろいろと出してくれどもおいしいのだが、とても一人では食べきれない量なので、食べ過ぎて腹を壊してしまった。

ナントウの森へ

ホームステイから再びバイクに乗り、5分くらい移動し、そこからいよいよ歩き始める。トウモロコシ畑の中を抜けると、突然目の前にナントウ川が現れた。川を渡ると向こう岸がナントウの森だ。とはいえ橋がないので歩いて渡らなければならない。濁流で底が見えないためどれだけ深いかわからない。前夜は雨が降り続いたため水量豊かで、流れもかなり速い。

今回は大名旅行で、受け入れ旅行会社（ADVENTURE INDONESIA）のフントさん、ガイドの国家資格を持つアーディ君、それに森林局のレンジャー・リスノーさんとデディ君の2人、計4名が私一人をエスコートしてくれる。

リスノーさんの先導で川に入る。なぜか力づくで上流に向けて斜めに川を横切っていく。水は腿の付け根辺りまでである。なんとリスノーさんのスリッパストリームに入り、水流に立ち向かう。5分ほどかけ、ようやく全員無事渡りきることができた。もっと増水したらどうするのだろうか心配になったが、そこは熱



帯。竹でいかだを組んで渡るとか何とかするからティダ・アババ（問題ない）とのこと。

森に入ると清浄な空気が流れ、とたんに熱帯の音があふれる。常に鳥の歌声や虫の鳴き声が響いているのが熱帯雨林というものだ。すぐに建物が見えた。橋もない激流の向こうに家があるとは誰が想像しようか。この建物は森林警備のための警察詰所だそうで、数名の警官が常駐しているようであった。ここに立ち寄るために無理やり川を上流に向かって横切ったのであった。

ここで簡単な手続きを済ませた後、いよいよバビルサの待つ塩場の泥地へと向かう。道なきジャングルをナントウ川に沿って遡っていくと、まもなく巨大な板根をもつラオの木（ウルシ科）が現れた。板根の端から端までは8mほどもあるかというとんでもない巨木で、高さも60mくらいはありそうであった。以前訪れたタンココ（マナド）にはこのような巨木はなかった。スラウェシの熱帯雨林の奥深さを改めて知らされることとなった。奥へ行くともっと大きなラオや北半球で唯一自生するイングラント・ツリーと呼ばれる巨大なユーカリ（直径2m高さ60m）があるそう。ちなみにナントウ川のナントウ（ニヤトー）とはアカテツ科の樹木の名前で、俗に南洋桜とも言われ、材質が桜に似て赤みが強く、家具や建材、楽器などに広く使われているそうだ。

バビルサの泥地

巨木の写真などを撮りながら、警察詰所から歩くこと45分で目指す塩場の泥地へと到着した。

観察場所は幅2mくらいのピロウの葉の目隠しがあり、その後ろに2人が腰掛けられるくらいの簡易なベンチが作られている。見ると40m四方くらいの狭い泥地で、こんなに近くにいる本当



ヘックモンキー



スラウェシメガネサル

にバビルサが来るのかと半信半疑となる。そんな場所なので大人数ではとても観察できないということで、5名のうち2名は森の中で待機し、レンジャーのリスノーさんとワントさん、そして私の3名でバビルサを待つこととなった。

静かな森の中に鳥の歌声が響き、それを聴いているだけでも幸せな気持ちになる。思っていたほど蚊もおらず、暑くもない。バビルサの声がしたと言われるが私にはさっぱりわからない。

待つこと1時間、ついにその時が訪れた。リスノーさんに呼ばれ、指差す方向を見ると、そこにはバビルサが立っていた。イメージどおりの牙が伸びている。紛れもなくバビルサの雄である。泥地の右端の藪の近くにいたため写真は撮るのに苦労していると、いつの間にかもう1頭、もっと立派な牙を持つ雄が泥地

の中央奥に姿を現していた。こちらは全身が見えてぼっちりと写真が撮れる。泥地の水を啜り泥をなめている。バビルサは青酸化合物を含む有毒なバングノキ(イイギリ科)の実を好むために、解毒作用のあるミネラルを含んだ泥地にやってくるといわれている。この実は直径が20cmを超え、有毒だが栄養価が高く、1~2個で一日の栄養を賄えるほどらしい。これほど近くに人がいても泥地に出てくるのは、それなりの必要性が高いからなのだろう。結局この日は昼食をはさみ5時間ほどの観察で、雄3頭と3頭連れ母子の計6頭のバビルサが複数回に渡って泥地を訪れるのを観察することが出来た。

この泥地にはスラウェシ固有の野生牛アノアやルサジカ、ヘックモンキーなど様々な動物が訪れるとのことであったが、この日見ることができたのは、バビルサのみであった。しかし世界の珍獣バビルサがこれほど簡単に見られるとは奇跡のような場所である。

ナントウの森沢歩き

翌日は半日、ナントウ川の支流の曲がりくねった小沢を歩き自然観察を楽しんだ。ナントウ川の岸辺ではいきなりヘックモンキーの30頭ほどの群れに出くわした。スラウェシマカクと呼ばれるマカカ属のサルが7種いるといわれているが、そのうちの1つで後ろ足が薄茶色をしている。肩線が盛り上がり間延びした黒い顔をしているのは、共通。サル群れはいつ見ても見飽きることがない。

沢ではアノアの食痕や糞を見たり、アカコブサイチョウなどのバードウォッチングを楽しんだりした。また、まるでヤクシカのようにヘックモンキーの下でおこぼれを待つルサジカとの出会いもあった。時にサル糞も食べるといふから、常緑樹の森のシカの暮らしの大変さは、いづこも同じということか。さわやかで心地よい沢歩きを満喫することが出来た。

ナニ・ワルタボネ国立公園へ

次は、サリタリ村を後にして、ナニ・ワルタボネ国立公園を目指した。帰りもバイクに跨り同じ道を引き返すかと思ったら、さすがに来た道は危険すぎるということで、別の道を帰った。そちらもとんでもないモトクロス道路であったが一応道の形をとどめており、4輪自動車ならば走れそうであった。サリタリ村も車の来ない未開の地というわけではなかったようだ。

ゴロンタロシティから東へ約24km、車で1時間ほどの国立公園へと向かう。インドネシアの自然保護制度としては、自然保護地よりも国立公園の方がより厳しい規制がかけられているそうである。ここでの狙いは、スラウェシメガネサルにクロザル(ゴ

ロンタロモンキー)そしてスラウェシのシンボリックな鳥マレオ(セレベスツカツクリ)である。

ボネ川を渡る吊り橋が車は通れないので、再びバイクに乗り換えて森へと向かう。とにかく田舎では車ではなくバイクが足となる。正式には17歳から免許証をもらえるらしいが、8歳くらいからバイクに乗り始めるというので、足が届きそうもなさそうな小さな子供が運転していて驚かされる。

10分ほどでバイクを降りて歩き始める。最初のうちはバッファゾーンということで、焼畑農地のような場所が続くが尾根を越えると美しい熱帯雨林に突入する。すぐにセレベスコノハズクが出迎えてくれた。夜行性のメガネザルは、昼間は株立ちする竹やヤシの中で隠れているということで、レンジャー2名(ナントゥとは別)が探し回り見つけてくれる。睡眠中をお邪魔するのはいささか乱暴であるが、とにかく見つけるところはさすがである。竹藪の中に2匹のメガネザルがじっとしていた。クリクリの目に小さな鼻が突き出て、まさに鼻眼鏡をかけているようだ。夜のように逃げないのでじっくりと写真を撮る事ができる。続いてすぐそばにあるマレオの産卵地へ向かう。あちこちが大きな穴だらけなのは、マレオが産卵するからだ。この鳥は、抱卵せずにウミガメのように卵を60cmくらい埋めて放置する。レンジャーがいささか穴を掘って卵を見せてくれるので、さすがにそんなことして良いのかと思ってしまうが、実はマレオの保護プログラムを実施しており、オオトカゲなどに卵を食われないように産まれた卵は保護施設に移して、そこで孵化させているので、産卵された卵は全て回収しているのだ。親が世話をしない分、マレオの卵は巨大で鶏の卵の倍以上はある。身体は鶏ぐらいだというので一度に産むのは1個だけ。2ヶ月くらいで孵化するが、生まれてすぐ飛べるのも、既に大きく育っているからだ。今回は保護施設内で孵化したマレオの雛を放鳥させてくれた。マレオは1年中誰かが毎日卵を産むそうで、この日も6個卵を回収した。早朝来れば産卵している姿を見れるらしい。マレオの保護ステーションの小屋で昼食を摂っていると、クロザル?の群れが現れた。彼らはクロザルというが、尻だこが黒ずんだ灰色をしており、近縁種のゴロンタロモンキーなのではないかと思われる。このあたりの関係は要確認だ。高い木の上を移動しており、良い写真が撮れなかった。もう少し粘りたかったが、セレベスカワセミを見つけたと呼ばれたのでそちらを撮影。小さくて実に美しい。なぜかフレンドリーで逃げないのでじっくり写真が撮れた。この森はいちじくなどの木の実が豊富で、野鳥が豊かであった。

そしてジンバイザメ

森で様々な珍しい生き物を満喫した後、最後に訪れたのはボツバラニ・ビーチ。ココヤシの揺れるビーチにカラフルなアウトリガー付カヌーが並び、青い海は開放感抜群だ。ゴロンタロシティからわずか30分のビーチでなんとジンバイザメが見られるという。

カヌーを漕ぎ出すと50mほどでジンバイザメポイントにたどり着く。最初のポイントにはいなかったので、マシーンで隣の浜へ移動することとなったが、船外機付の船にでも乗り換えるのかと思いきや、なんとカヌーに長い軸のついた船外機を装着し、そのまま出発。隣の浜では既に複数の船が2匹のジンバイザメとの出会いを楽しんでいた。なぜここにジンバイザメが集まるのかはわかっていないと聞いていたが、船に寄って来るのは、エビの剥き殻をあげているから。餌付けには引かかもの、7mはあるかという巨大なジンバイザメのまあなんと癒されることか。インドネシアの女性達が歓声を上げてジンバイザメを撫でている姿を見ていると、小さなことはどうでも良いと思えてくる。

バビルサからジンバイザメまで奇跡のような出会いが訪れるゴロンタロだが、未だエコツアーがシステム化されていない無垢な土地なので、いささか心配でもある。いつまでもこのようなパラダイスが続くよう祈りたい。



ジンバイザメ



宮之浦の年中行事

渡部 幸

宮之浦集落に住んで丸4年。この間、青年団や上浜（宮之浦内の集落名）のみなさまに声をかけていただき、様々な地域行事に参加し、独特の文化にふれてきました。感謝を込めて、今回は宮之浦集落の年中行事についてまとめてみたいと思います。

【六月灯】

まずは、今まさに奉納灯籠製作中の六月灯。六月灯とは鹿児島県内の神社・寺院等で旧暦の6月（現在では7月）に行われているお祭りです。

薩摩藩第二代藩主の島津光久が、上山寺新照院に観音堂を建立して供養のために燈籠を灯したのを、領民達が見習った事がこの祭りの始まりと言われていますが、それ以前からも疫病払いや虫追いを兼ねて灯明をささげる風習があったともされています。

梅雨明けの季節でもあり、稲に害虫が発生する時期で、悪疫退散・五穀豊穰・家内安全などを祈願し、こうした民間の行事が洗練されて六月燈の祭りに発展したらしいです。各々が描いた灯籠を宮之浦では救益神社と久本寺で火を灯し御祈願をしていただいています。

【おた踊り】

宮之浦区のお盆の風物詩といえば、「おた踊り」。約330年前の貞享3年、町田孫七忠以（ただもち）が宮之浦村に釈迦堂を建立し、屋久島中の僧侶が集まり、善男善女が笠踊りを踊っ

たのが発祥とされ、その後これが全島におよび、扇子踊り、銭壺踊り、四ツ竹踊り、千女万女踊り、おつや踊り、なぎなた踊りなどが加えられたそうです。戦時中は途絶えたものの、昭和42年に宮之浦区・婦人会・青年団を中心に復活。平成元年からはお盆に区内各所で回る形に復活しました。まずは久本寺、それから初盆の家々を回ります。

昨年、私もおた踊りに参加させていただいたのですが、歌詞を見て初めてこういう意味だったのか！！というものがありました。屋久島弁は難しい・・・。



豊作祈願のなぎなた踊り

【十五夜】

一般的に十五夜といえば、月が見える場所にススキやお団子、サトイモなどを供えて月を愛でるといふなんとも風情のある会がメインかと思いますが、屋久島の十五夜はもっと大迫力！

なんと、お月様の下で大綱引きが行われます。

十五夜前日に集落の有志により編み上げられた直径30cmほどの大縄を海側の集落と山側の集落に分かれて引き合います。

後半戦は島民 vs 観光客となり毎年大盛り上がりです。



今までは、綱引き歌としてカセットテープ(!)で「愛宕参り」の歌をかけていたのですが、「ぜひ、生歌で！」との声をいただき2015年より宮之浦青年団有志で「宮之浦応援歌」を歌わせていただいています。こちら楽譜などは残っていないため、カセットテープ音源から音や歌詞を拾いました。

まさに口頭伝承！



謡い手から盛り上げていきますよ

【サンタクロース大作戦】

こちらは比較的新しい行事なのですが、小学校低学年の子供さんがいるご家庭にサンタクロースに扮した青年団員たちがプレゼントをもって突撃訪問！という企画です。

突然の出来事過ぎてただ茫然と立ち尽くす子供たちも・・・。



サンタ以外は外で鈴など鳴らしています

【トシノカンサマ】

最近は何も聞かぬ子には鬼さんから電話がかかってくるそうですが、宮之浦では大みそかの晩に世にも恐ろしいトシノカンサマ（年の神様）が山から下りてきます。カンサマは年餅（これをもらわないと年が越せない!!）を配りにくるのですが、かなりの曲者なんです。



頭も顔も真っ白。裂けたように大きな口。手には鎌と悪い子を山に連れて帰るための背負子。見るからに恐ろしいですね。

一斗缶をガンガン鳴らす音が集落内に聞こえ始めたらトシノカンサマが山から下りてきた合図です。カンサマは悪い子が住む家を探し出し怒鳴り込んでいくので、もう子供は大パニック！今までの記憶がフラッシュバックし、

カンサマが現れたと同時に泣き出す子も少なくありません。なぜかカンサマが怒鳴る言葉は自分に身に覚えのある事ばかりで子供たちはさらに震えあがります。なんでそんなことまで知ってるんだと。実はカンサマ、子供たちの保護者に呼ばれているのです。12月中旬、

公民館にはトシノカンサマポストが設置され、その中にこういう内容で叱ってほしいという手紙が投函されます。ですので、子供は言い逃れはできません。そんな恐怖の時間を過ごした後、トシノカンサマは山の神様にお伺いを立てます。「もう（年餅をやっても）よいかか？」と。しかし、山の神様はさらに厳しいお方なので「まだまだ！」と声を荒げ、家じゅうの壁をたたき、窓を揺さぶります。そして、最終的には来年いい子で過ごす約束ができれば、年餅を渡し再びガンガンと一斗缶の音とともにカンサマは次の家に向かうのです。

友人たちが小さかった頃はトシノカンサマが怖くて12月くらいからはいい子にしていたそうです。一週間前には突然サンタさんがやってきて、大喜びしたかと思ったらまさかの展開。毎年やっていますが少し気の毒です（笑）

友人们が小さかった頃はトシノカンサマが怖くて12月くらいからはいい子にしていたそうです。一週間前には突然サンタさんがやってきて、大喜びしたかと思ったらまさかの展開。毎年やっていますが少し気の毒です（笑）

【1月7日】

1月7日、この日は朝から晩まで行事が続きます。まずは【七草】。一般的にはお正月で疲れた胃を休め、春の息吹を体に取り入れるということで、地元愛媛ではお正月休みは七草バイト（収穫・箱詰め）があったりしたのですが、

ここ屋久島での主役は数え歳七歳になる子供たち。彼らはお重をもって七件の家を回り、それぞれの家庭から七草粥をもらいます。その七草粥を食べた子供たちは病気をしないといわれているそうです。

お重に集めて回るということで、このときのおかゆはほとんど汁のない固めのおかゆになっていることに妙に感心してしまいました。

午後3時ころからは【鬼火焚き】が始まります。正月飾りに寄ってきた鬼や悪霊を火や音で追い払う無病息災を願う火祭りです。愛媛ではおとうどさん（こちらは小正月に執り行われます）と言っていたのですが、やはり「ところ変われば」ですね。

大きな櫓を組み、その袂に各家庭から持ってきた正月飾りを並べ、その先端には厄に見立てた鬼を吊るします。櫓につながっている縄を七五三を迎えた子供や厄年を迎えた方が中心に持つ中、鬼（厄）を焼き払います。

昔は銃で鬼を撃っていた(!)そうなのですが、今は爆竹で代用されています。

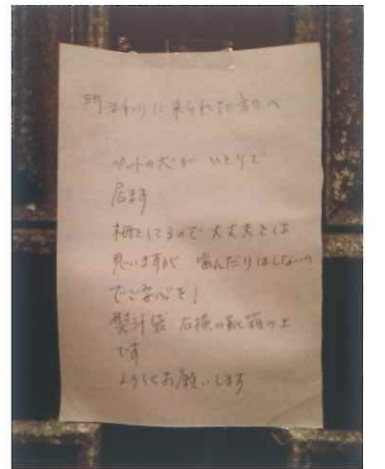
そして櫓とつながっている縄が炎でちぎれたらそれを持って帰ります。



年の初めの縁起物ということでたくさんの方が集まり、新年のあいさつが繰り広げられています。鬼火焚きの片付けも終わり、ひと段落。と言いたいところですが、あともうひとつ。【門まわり】があります。

こちらも屋久島のいくつかの集落で行われていて、その集落の子供や青年たちが各家庭と商いをしている家、全件（喪中の家庭は除きます）で「祝い唄」を歌って回るというものです。

「いおーてもーす（祝うて申す）」から始まる歌詞には豊漁豊作、家内安全など、これでもかというほどの縁起の良い言葉がいっぱいつまっています。しめ縄という結界が解かれたこの日、まずは家の中に験を担ぎこむということでみんなが心待ちにしてくれているこの行事。どうしても家をあけないといけないう方もこんな張り紙を残していただきます。



精一杯歌って帰りましたよ！

と、今回ご紹介した伝統行事、すべて見学可能です。おた踊りや門まわりの歌は各集落によっても違いますので、いろいろな集落を回ってみるというのも新しい屋久島の楽しみ方ではないでしょうか。また、見学だけでなく参加できるものもありますので、タイミングが合えばぜひご参加くださいね。

山・森・海・川、そして文化！

対談

屋久杉はどのように切られ始めたのか

小原比呂志 / 大沢 成二 (写真家)

日増の法華宗布教とはなんだったのか？

小原 15世紀半ばの応仁の乱で関門海峡の治安が悪化して、堺商人が通れなくなり、大陸との貿易航路を九州南回りルートに転換した結果、赤尾木（西之表）を港湾都市として活性化させるチャンスを手にしたのが種子島氏です。港湾には造船修繕がつきもので、そこに船材としてのスギ材需要が生じていたはずなのです。スギは屋久島にある。でもそこは山の神の祟りがあり、伐採には抵抗があったと言われている。思うままに開発できない。

ほぼ同じタイミングで、種子島・屋久島では法華宗の布教が唐突に進みます。法華宗は現世利益を認める都市型宗教で、京都の町衆、つまり商工業者から支持されていて、瀬戸内海の港町の発展に乗じて教線を伸ばしていった。その種子島進出には、よく言われるように種子島出身の僧日典の法難がきっかけとなり、その意思を継ぐ日良が推進したというストーリーがあるわけですが、やはり赤尾木港の発展に連動していると思います。

屋久島では、山の神をうち破るイベントが2回ありました。1488年の日増の祈祷と17世紀初頭の日章（如竹）の祈祷です。いずれも法華宗の有力者が法力をもって山の神に打ち勝っています。日増は本能寺の若手トップといていい高僧で、公家の出だと言われています。当時の公家といえば、現在なら一流の歌手とか俳優が来てライブをやったようなものです（笑）。この日増が屋久島布教を完成させたというわけですが、屋久島では「山の神を畏れて奥山の杉を切ることができなかった」のですから、この段階で奥岳の屋久杉に関するタブーが解かれたとみていいでしょう。

もともと屋久杉の利権を誰が持っていたのか。これが見えてこないのですが、屋久島の各村がそれぞれに利用して

いたのは確かでしょう。屋久島全体を統一するような権力者は存在せず、村ごとにばらばらに動いていた。倭寇の影もそのあたりと関係しそうです。いうことを聞かずまとまりのない島を制圧・支配するのはとても大変なんです。

大沢 それで種子島氏は法華宗を利用したと！

小原 法華宗が山の神を制圧することによって、屋久杉の伐採が可能になったのではないかと。そして日増を開山として、種子島家が屋久島五大寺を開基したわけです。両者が利益を得ています。画期的ですよ。

大沢 画期的です。

小原 まあ、法華宗は布教用のストーリーを作り上げるのがうまいし、日増や如竹（日章）の話も伝承をそのまま受け取る訳にはゆきませんが、ある程度法華宗サイドに都合よく書かれている、というバイアス込みで考えればいいのかと思います。

大沢 しかし、これらの歴史的経緯に、もののけ姫のストーリーが被るように感じてしまいました。

小原 まさにドンピシャでしょう。古い神を新しい神に制圧させて、解放された自然資源を人間が手にするという、定型のストーリーです。

大沢 やっぱりそうなんですか！

小原 宮崎監督が屋久島について「あの森はもう侵された森だ」ということを語っていました。すでにもののけの森ではない、ジコ坊のように泊如竹という僧が関わって侵してしまった、って（笑）

大沢 ものけ姫、もう一度その視点で見返してみます！

日章、または如竹散人について

大沢 しかし、聖人泊如竹と、あの俗っぽいジコ坊を結びつけたら怒る人が出てきそうですが、僕は、泊如竹という人は現実的なものの考え方をする人だったのだと考えています。つまりジコ坊的な要素を含む人（笑）

小原 舵工つまり船大工の子、と伝承されてますよね。江戸時代のちっちゃな漁船を細々とつくる貧しい職人、みたいなイメージですが、このころは大航海時代ですよ。50年前には種子島が勘合貿易船を作り、倭寇のボス王直がポルトガル人と鉄砲を運び、琉球船や堺商人の船がルソンか

ら物をガンガン輸入し、ザビエルが来日し、東南アジア各地に日本人町が林立して、という時代の船大工ですからね。**大沢** なるほどです。泊如竹とジコ坊が重なってきました。では、泊如竹は子供の頃から屋久島の杉が島の外へ運び出されて行くのを見て育っていたのですね。

小原 大型船を持つ運送業者は大資産家なんです。だから船大工ではなく、造船業者というイメージなのではないかと思っています。江戸時代になりますが、薩摩藩の『屋久島規模帳』によると、賃金の額は船大工の方が屋（家）大工より上です。如竹は優秀で尼崎本興寺へ進学したわけですが、今でいうと、屋久高から京大へ進んだようなものでしょう。旅費やら学費やらどういう仕組みになっていたのか興味がありますね。寺が負担するのか、家が寄進するのか。それはともかく、造船業者である泊家は、屋久杉の伐採に直接関わっていた可能性が高いです。

大沢 木材が豊富にある屋久島で造船業を営む事は合理的ですね。

小原 そう。あと鉄ですね。造船用の船釘が必要なんです。実は安房にカナクソガワという地名があるんです。砂鉄からたたき出した不純物の残渣が金糞（カナクソ）で、屋久島でも鉄を作っていたようです。楠川と宮之浦でも製鉄が行われており、一昔前なら金糞が拾えたそうです。

大沢 里地に近い伐り易い大木は造船に使われて無くなった、と考えれば自然でしょうか？

小原 木材の需要は、島外への建築材と、造船材でしょう。クスノキなどの巨木材を必要とした中世前半の準構造船と違い、大型化した構造船は棚板で作ることができました。水に強く板に加工しやすいスギが使われます。だけど帆柱には丸太が要るんですよ。五百石船クラスで長さ27m以上根元48cm角、七百五十石船クラスの大船なら32m以上根元63cm角という大材を使うと『屋久島規模帳』にあります。近年、佐渡で千石船「白山丸」を復元した例があり、参考例として面白いのですが、樹高35m根元直径130cmという立派なスギを使って、長さ21m根元70cm角の帆柱を作っています。屋久杉ならちょうどコスギサイズのを切り出して使うわけですね。しかしそうすると、現実的にどこからどうやって切り出したのか。

屋久杉丸太を搬出するには？

小原 最も考えやすいのは、屋久杉のある森から、斜面に修羅を何段も重ねて麓まで降ろせて、そこから馬で引き出すことのできる立地です。修羅は斜面にジグザグを切るように作るので、いろいろルートはとれるだろうと思います。ただ斜面を登ることはできない。すると可能なのは、乗生の乗生歩道一帯、安房の千頭川流域、船行のテラヤマ、白谷、永田あたりでしょう。白谷雲水峡からは、三本杉から尾根に沿ってローソク尾根頂稜の平坦部を宮之浦川に下したという話が残っていますね。それから吉田岳の「大たいら」。これは今は忘れられた古道のあったらしいところです。吉田方面にも永田にも、宮之浦川にも降ろせたのではないかと、思います。宮之浦川なら谷底が平坦ですから、丸太を川流したかもしれない、と故山本秀雄先生がおっしゃっていました。とくに資源も港もない吉田がなぜ歴史的に存在感をもっているのか疑問だったのですが、もしかしたら屋久杉がキーなのかもしれない。

不思議なことに屋久杉があってもいいのにほとんどない場所が島内に何か所か存在します。それは屋久杉を切り出しやすい地形のある場所と一致しているんです。

大沢 しかし、その当時に村同士は互いに連携できていたのでしょうか？安房の造船は、安房近辺で完結していたのでは？と思います。どうも屋久島は歴史的に集落単位でのまとまりが強く、逆に他集落と連携は疎だったように思えるのです。

小原 だから各集落の村界が確立されたんでしょうね。

大沢 宮之浦も、川の右岸と左岸では相当温度差があったように感じています。

小原 村ごとに同じ木材抛出地として競合もするでしょうね。ただ安房は周辺の村の木材集積地だったはずですよ。取引があれば、関係は作られるので。

大沢 経済的に結びついていたと。なるほどです。

小原 船行からは安房に木材を出してたんじゃないかな。江戸時代に藩の屋久杉蔵があったのは、中型船以上の入る港川のあった安房、永田、宮之浦、乗生。そこらが木材の集積地でしょう。

大沢 やはりその4集落は玄関口として力を持っていたのですね。

小原 安房川の下流に木材を落として、村まで流すということはしていたようです。するとトンゴ滝の下～水明荘のナカドでしょうね。北岸の船行の上の方、松峰のちょっと上手のあたりに「オトス」という地名があるんですが、関係あるかも。それから春牧側の斜面は使っていたでしょうね。安房前岳周辺と千頭川（ちがみがわ）流域から搬出していたと思います。

愛子岳と三野岳（船行前岳）の間に不思議なほど平らな地形がありますよね。テラヤマ（平山？）と呼ばれてますが、その東を流れ下る落川（おとすがわ）の源流の三俣のところに、平坦な造成地があるんですよ。テラヤマの台地から木を降ろすとすれば、ここかなと。で、落之滝というのはあれは何かと。よくわからないんだけど、なにかやってたっぽい。三野岳（船行前岳）の山頂部を迂回するルートだった可能性もあります。

それと『屋久島大絵図』を見ると、安房川左岸の今の鍋山林道にそって、さらに奥へ続く山道があったらしいです。千尋滝の下で右岸に渡って、荒川の方に入っていたらしい。安房の岳詣りは、明星岳、中島権現、太忠岳なので、ちょうどこのルートに沿っています。

この辺りの木は全部安房に集まってくる。その用途は造船と、その船で運ぶ木材製品で、その中心にいたのが泊家かもしれない。

大沢 泊家はその時代から目立った存在だったのですね。当然島津も注目していたと。というか、泊家は島の中で力を持っていた。島津が如竹を召し抱えたのもうなずけます。

小原 いや、それはわかりません。如竹がはっきりと存在感を示し始めるのは、あくまで国分正興寺の南浦文之のところに行ってからです。

本能寺について

小原 だから如竹の生涯と業績は、もっとくわしく調べる必要があるんですよ。如竹は1587年、京の本能寺に登って修行した、ということになってますが、当時本能寺は「なかった」んです。信長の件で焼けてしまって。それで学林（大学）のあった尼崎本興寺に入っています。本能寺・

本興寺は両山と呼ばれ、法華宗の要でした。

大沢 ですよ！そこ、おかしいと思っていました。でも尼崎に行った記録があるのですね。宮之浦の久本寺は本門流ですが、確か本山は本興寺だったはずですよ。

小原 当時の本門流の本山は本能寺・本興寺の二寺で、これを両山と呼びます。この時の本興寺の貫主（法華宗のトップ）日蓮上人はなんと種子島出身。

大沢 へえ！すごい、繋がりますね！

小原 この人が本能寺再建の責任者となり、これに対して種子島家から銀四百貫その他が寄進されます。今の4億円見当かな。『法華宗宗門史』によると、この大事業にあたって日蓮上人に随行したのが若き日の日章（如竹）だったのではないかと、法華宗側では見ているようです。当時20歳の俊英です。面白いことに、本能寺再建が始まったのが1589年、で、豊臣秀吉の方広寺用材調査で伊集院忠棟が屋久島に来たのが同じ1589年。その時に小豆島船11隻で木材を京に送っています。

大沢 屋久島の材料が本能寺再建の為に京まで行ったということですか？

小原 法華宗側はその可能性があると見てますよ。

大沢 でも当然協力したでしょうね。

小原 本能寺に行ったら、信長の墓の横の方に、島津義久の正室妙蓮院の墓がありました。この人は種子島家の姫君。時堯の次女です。種子島家は大スポンサーですからね。

大沢 秀吉はそのあたりを目にして方向寺の用材としても屋久島に注目したのですかね？

小原 いや、島津義久が豊臣家に下ったのが1587年で、そのとき石田三成が「ではおまえのところの屋久島の木材が何本あるか、スギ・ヒノキについて調べて報告しろ、早くしろ」と命令しています。その5年前の82年に義久が書状で「九州各国からの船に屋久島材を売るな」「また種子屋久から九州各地へ木材を売りに行くな」という命令を出していますので、豊臣家は早くからその情報を持っていたと思います。三成は秀吉の事業をいろいろ進めるためにとにかく木材集めに苦心していたようなんです。

大沢 屋久島に良材があるのは既に周知の事実だったのですね。

小原 本能寺は末寺の人事権を持っていて、各地の法華寺

の住職は、1~3年に一度、上京して本能寺・本興寺に行く決まりがあったそうなんです。つまり本能寺は種子屋久の情報をリアルタイムで入手できた。そこに信長が常駐していた。これは南蛮情報と鉄砲関連でよく指摘されることですが、それを引き継いだのが秀吉です。

また鉄砲業会では、よく知られている根来衆や堺商人、近江国友など、いずれも種子島との関係が深く、人の行き来も頻繁だったようです。本能寺は細川家に種子島の鉄砲を仲介販売してますしね。

また古くなりますが、15世紀半ばの種子島家当主幡時は熊野とのつながりが深く、種子屋久と修験者（山伏、熊野神人）が関連していた可能性が高いようです。古来木材生産の先進地は飛騨・木曾と熊野です。このへんはすべて「蓋然性」の話ですけど。

大沢 蓋然性は高いと思います。

小原 中世までの大型建築といえば、寺社なんです。他に大きな建築はほとんどありません。城が大型化するの安土桃山以降です。それ以前に確実に屋久杉材が運ばれたことがはっきりしているのは鹿児島神宮と南林寺、京都の方広寺です。安房川などの奥地からは大型の木材の搬出が困難だったのですが、天下泰平となった江戸時代初期の建築ラッシュが始まり、柱や板などサイズの小さな建築材の需要が増えたことにより、山中での製材と人肩搬出が可能というか主流になっていったと考えることができるでしょう。その典型が板瓦=平木です。

大沢 その時代に泊如竹が現れるのですね！

小原 改革者ではなく、実務家として動いたと思うんですよ。それから江戸時代に入ってから、種子島家から本能寺へ屋久杉が奉納されたという記録も『法華宗宗門史』にあります。

研究の進展とともに歴史は更新される

小原 中世以前の歴史資料には、屋久島がほとんど登場してこないでその姿が見えにくいのですが、周辺の歴史の中に屋久島もともにあったのは明らかです。一方自然科学の側からも、屋久杉利用の歴史は時代をさらに溯りつつあります。「泊如竹という偉いお坊さんが屋久杉の伐採を始

めました」という島内で言われているストーリーは1980年代台以前のものなので、リニューアルしていく必要がありますね。

大沢 こうして見てみると、いま一般的に語られていることと、新たに分かってきたことは、随分違いがありますね。やはりそろそろ新しい教科書が必要に感じました。ぜひ新しい教科書を作っていただきたいです！

小原 いや、これがオーソライズされているとはいえません。現在知識として定着していることのうち、事実と尾ひれとを仕分けして、整理していかないとなりませんね。僕も山本先生が言い残されたことに引っかかって、掘り下げただけです。

大沢 それでも、小原さんが調べられていることが、後々に残らないのはとても損失だと思います。

小原 こういう話はタコツボにこもって自説をつぶやいても意味がないので、いろんな視点から議論をしてゆく必要がありますね。琉球史、東シナ海域史、東アジア史、考古学、それから歴史生態学なんて言葉はあるのかな？その辺は押さえておきたいですね。

なお「屋久杉」という言葉には三種類の定義があります。①屋久島に分布する自生のスギ。ヤクスギ（生物学的）②樹齢1000年以上のものにたいする敬称（世俗的）③銘木としての屋久島の自生杉（材木業界）。

かつて屋久杉のほとんどは伐採され、製材できず用途のない古木は放って置かれ残った。伐採跡地には新しいスギ林が再生し、200年~400年、場所によっては600~700年の壮齢木となって現在の森を作る。前者が屋久杉、後者が小杉、という言い方でいいと思います。かつての原生木と若木との材質、特に耐久性の優劣がヤクスギーコスギという呼び分けになったのではないかと、というのが日下田紀三さんの説です。

「屋久杉は保護しています」といって、数百年の巨木を切り「これは900年なので屋久杉ではありません」とうそぶいたり、一方で300年の木を「屋久杉です」といって販売していたわけですから、ごまかしも悪いところですね。なので僕は1000年以上を云々という言い方はあまり使いません。

大沢 スッキリしました。

Calendar・2014-15

2016

- 6/29-7/20 NHK「自然百景」ロケ同行 小原・松本
7/5-9/26 岡山理大岩田君エコツアーガイド研修
8/1-2 城星学園中高研修旅行受け入れ
8/29-31 小原・福留 日本蘚苔類学会屋久島大会事務局
9/1-5 岡山理科大学エコツーリズム技法実習
9/13-14 立教大学栢谷ゼミ研修受け入れ
9/27-28 松本 宮崎大学サンゴ調査に同行
10/2-3 東京環境工科専門学院スノーケリング実習第1期
10/2-3 小原 櫻島ジオパーク講演
10/4-6 松本 JESガイド講習会青森講師
10/13-14 東京環境工科専門学院スノーケリング実習第2期
10/16 山の神祭り(益救神社でお祓いを受ける)
10/18-20 市川 里巡り研修で香岐来訪。鯨組の家に屋久杉天井
10/23-24 東京環境工科専門学院スノーケリング実習第3期
10/29 松本 環境省ガイド養成講習会のための検討会
11/17-19 JES イギリスからの視察受け入れ
12/3-5 松本 JESガイド講習会八ヶ岳講師
12/11-14 小原 WFA プロフェッショナルレベル受講
12/15 小原・渡部・福留 WFA ブラッシュアップ受講
12/16 松本 銀座好日山荘にて机上講義
12/17-20 NHK ロケハン
12/18-20 松本 JESガイド講習会下呂温泉講師
12/21 松本 JES 理事会

2017

- 1/8 韓国テレビ局撮影受け入れ
1/8 松本 南日本新聞こども新聞取材
1/9 大阪大学実習受け入れ
1/11-13 福留 日赤救命救急講習受講
1/11-13 松本 JTB 総研 ヒアリング同行
1/19 酪農学園大学 JICA 研修受け入れ
1/24-26 松本 環境省ガイド講習会基礎編 京都美山町 講師
1/28-30 松本 同上 日光 講師
2/4-5 松本・小原・市川 日本山岳ガイド協会更新講習受講
2/8 松本・小原 普通救命救急講習受講
2/10-12 松本 環境省喜界島サンゴ礁保全ワークショップ事例報告
2/13-14 渡部・福留 屋久島ガイドセミナー受講
2/21-23 松本 環境省ガイド講習会スキルアップ編美山町講師
2/25-27 松本 同上 日光 講師
2/24-25 小原 環境教育フォーラム参加
3/6-11 松本 徳之島・沖永良部島ガイド講習会講師
3/15 小原 屋久島高校白谷雲水峡実習講師
3/17 松本 環境ガイド講習会検討会
3/23 松本 長男に初孫が誕生
3/26 龍谷大学ゼミ研修旅行受け入れ
3/16-30 松本 奄美大島ガイド講習会講師
4/11 小原・福留 NHK スペシャルロケ開始～6月
4/14 市川 ガイド認定テキストの委員会報告を提出

Contents

巻頭言 還暦を迎えて	松本 毅	1
屋久島の夜を楽しむ	福留 千穂	2
如竹散人乱拍子	松本 淳子	4
フィールド・オブ・ドリームス～スラウェシの奇跡	市川 聡	6
宮之浦の年中行事	渡部 幸	10
対談 屋久杉はどのように切られ始めたのか	小原比呂志・大沢成二	12

- 5/15-17 北海道・自然フィールドたび倶楽部ツアー受け入れⅡ
5/28 松本 縄文杉発見50周年シンポジウム パネリスト
6/3 市川 横峯縄文遺跡に竪穴住居復元
6/10-17 市川 スラウェシ島ツアー下見でバビルサと会う
6/16-17 松本 JESガイド講習会檜原村講師
6/24-25 松本 JESガイド講習会青森講師
6/24 小原 海外遊行人スキルアップ研修参加
6/25 小原 縄文杉50周年池袋屋久島フェスにて苔講演
7/2-3 渡部 JRCA講習会参加
7/18-20 松本 JESガイド講習会檜原村講師
7/21-23 四万十高校研修旅行受け入れ
7/21-24 春日部高校・茗溪学園実習受け入れ
7/29-31 岡山理科大学教員免許更新講習講師

執筆・取材記事

・エコツアーを楽しもう(市川) 循環とくらし第7号 特集 旅ゆかば～自然との共生～P56-61 廃棄物資源循環学会

エコツアーの楽しさと同時に負荷を考え、屋久島の山岳部環境保全協力金の取り組みを例に、エコツーリズムで自然を守る方法を提言している。

・横峯遺跡手作り公園化、住民有志ら竪穴住居復元 南日本深部2017年7月25日朝刊

市川が代表を務める横峯縄文クラブによる竪穴住居復元が新聞に取り上げられました。見学自由ですので、是非お立ち寄り下さい。

編集後記

☆還暦でも頑張っているのを見ると勇気づけられます。と若いガイドさんに言われても・・・汗(ま)☆志戸子に引越しました。また新たな文化にふれあえるかと思うとワクワクします。(さ)☆屋久島のヨモギをふんだんに使った「かからん団子」作りも、だいぶ上達してきました。道端のヨモギとかからん葉っぱには、つつい目がいきます。(ち)☆昨年まで夕方5時になると出勤してきていた「やぶ蚊軍団」今年は発生源を絶って撃退成功。(じ)☆今年の夏は、湿気が多くてとにかく暑い。ビールだけが頼りです。(い)

YNAC 通信(ワイナックつうしん) NO.34

発行日:2017年8月1日

発行:㈱屋久島野外活動総合センター

住所:〒891-4205 鹿児島県熊毛郡屋久島町宮之浦 368-21

TEL 0997-42-0944 FAX 0997-42-1850

E-mail: forest@ynac.com URL: <http://www.ynac.com/>

Facebook <http://www.facebook.com/Ynacyakushima>